

晩秋のすすきは咲いていますが、穂を細やかに観察し、その中に美を見出しています。広大なすすきが原は風に吹かれるとまるで海のように波打ちます。平易な表現ながらも、誠実な書き方で「金の砂子」を撒くさまを発見しました。(審査員・中島 悅子)

十五センチ程の  
花柄を取り巻く  
小さな花の数は  
数えることも出来ない。

かのしま・こうじ  
年生まれ。団体役員。横浜市  
神奈川区  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

着の端を握りしめながら、恐怖と戦うよ  
り一階の子供たちが、闇の気配に目を  
覚ますのは、と氣づいた。こんな父  
親の姿は見せたくない。  
する伝次郎は、何かに取りつかれた  
かりに大股で玄関に向かい、外へ飛び出  
していった。

翌朝、卓袱台はいつものように、居間  
に据えられていた。ただ壁には刀傷のよ  
うな跡が二筋、襖には返り皿のよなシ  
ミが残った。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「おれを言いますよ」と言いながら  
妻が声をかけても、伝次郎は背を丸め  
て両手を思いきり引き上げた。

「卓袱台には、伝次郎の好物の濃い目に  
に移し替え、その縁をつまむと同時に置  
に叩きつけた。ガチャヤンと割れるかと見  
えたが、茶碗はドンドン、ゴロゴロと転が  
りそのままに飯の塊が嘔に散らばつた。

次の瞬間、伝次郎は左手をついて胡坐か  
ら片膝をついた格好となり、目の前の漬  
物小鉢を握りこみにする。壁に向け牙一  
杯投げつけた。

小鉢は乾いた音を立てて真二つに割  
れ、一片は壁下に落ち、片割れは襖に割  
れ、食い残しの茄子が襖紙に一度張  
り付いてから、ボロつと剥が落ちた。

投げつけた右手が空ぐと、伝次郎は  
「こんなもの見えるかあ」と怒鳴りな  
がら、両手を卓袱台の縁にかけ、片膝を  
上に移し、その縁をつまむと同時に置

に叩きつけた。ガチャヤンと割れるかと見  
えたが、茶碗はドンドン、ゴロゴロと転が  
りそのままに飯の塊が嘔に散らばつた。

「卓袱台返し」はいい話で終わらせず、ショート  
ショートに必須のオチを用意していた点に好感が持  
てた。廃れていく職人気質というテーマもよい。だ  
が伏線も布石もなく、ラストのオチにつながるのは  
どうかと思われる。

(審査員・伊東 潤)

## 卓袱台返し

鹿野島 孝一 作

かのしま・こうじ  
1953  
年生まれ。団体役員。横浜市  
神奈川区  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「ほら時計見なさい。時間だよ」  
急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「文句屋の伝ちゃん」と伝次郎は会社で  
呼ばれていた。戦争前に工業学校を卒業し  
し、工作機械工場の職工となつたおかげ  
で微兵猶予となり、戦争中は、若くして  
戦艦の砲弾や飛行機のエンジン部品を造  
る工長として、学生勤務生や従用工の先  
頭に立つて、お国のために、お国のために  
だ、と尻を叩いてきた。それが、縁あつて同  
じ開拓団の男と再婚し、駐留軍向けの七

面鳥飼育や温室メロン栽培が大当たりし  
たら、今度は戦地からの引き揚げ社員  
が溢れ、そのあたりで伝次郎は東京本社  
の営業部に転勤となつた。

「俺が営業」。全国の納入先を回り、戦  
前の古い機械の代替えを獎め、ついでに  
新しい顧客も見つけてとい、という命令  
である。

人と話すのが得意じゃないから、機械  
をいじって、これをもう少し削ればま  
くいくんじゃないかな。画面はいままでの  
精度になつてるので、もつと丁寧に仕上  
げたほうが長く使えるんじやないか。  
そういうお姉さんの顔を想像しながらモノづ  
くりをするのが好きなんだ。それが営業  
されるよりマシな時代だった。

「ねえ、襖と壁さ」と勝が聞こえようと  
隣のお家、今日から建て増しの工事が  
始まるから、帰りは氣を付けてね」

「さすが横浜銀行のエリートさん。まだ  
あの家だけ建ててから大して経つてな  
いじやん。金持ちなんだねえ」

「謙ひは今まで寝てるの、遅刻するよ  
うだ」と笑ひながら、こた渤海になつてし  
て、と母の決まり文句だが、今日はこ  
となく沈んでいることに勝は氣づいた。

「謙ひは機関士になるんじゃなかつた  
か」「トンネルで煙に巻かれて苦しいからや  
めた」

そう言ひて事にしていたのに。

しかし、伝次郎は気の迷ぬ仕事をも  
うしなければならないらしい。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「田舎へ違うんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「ほら時計見なさい。時間だよ」

急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「文句屋の伝ちゃん」と伝次郎は会社で  
呼ばれていた。戦争前に工業学校を卒業し  
し、工作機械工場の職工となつたおかげ  
で微兵猶予となり、戦争中は、若くして  
戦艦の砲弾や飛行機のエンジン部品を造  
る工長として、学生勤務生や従用工の先  
頭に立つて、お国のために、お国のために  
だ、と尻を叩いてきた。それが、縁あつて同  
じ開拓団の男と再婚し、駐留軍向けの七

面鳥飼育や温室メロン栽培が大当たりし  
たら、今度は戦地からの引き揚げ社員  
が溢れ、そのあたりで伝次郎は東京本社  
の営業部に転勤となつた。

「俺が営業」。全国の納入先を回り、戦  
前の古い機械の代替えを獎め、ついでに  
新しい顧客も見つけてとい、という命令  
である。

人と話すのが得意じゃないから、機械  
をいじって、これをもう少し削ればま  
くいくんじゃないかな。画面はいままでの  
精度になつてるので、もつと丁寧に仕上  
げたほうが長く使えるんじやないか。  
そういうお姉さんの顔を想像しながらモノづ  
くりをするのが好きなんだ。それが営業  
されるよりマシな時代だった。

「ねえ、襖と壁さ」と勝が聞こえようと  
隣のお家、今日から建て増しの工事が  
始まるから、帰りは氣を付けてね」

「さすが横浜銀行のエリートさん。まだ  
あの家だけ建ててから大して経つてな  
いじやん。金持ちなんだねえ」

「謙ひは今まで寝てるの、遅刻するよ  
うだ」と笑ひながら、こた渤海になつてし  
て、と母の決まり文句だが、今日はこ  
となく沈んでいることに勝は氣づいた。

「謙ひは機関士になるんじゃなかつた  
か」「トンネルで煙に巻かれて苦しいからや  
めた」

そう言ひて事にしていたのに。

しかし、伝次郎は気の迷ぬ仕事をも  
うしなければならないらしい。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「ほら時計見なさい。時間だよ」

急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「文句屋の伝ちゃん」と伝次郎は会社で  
呼ばれていた。戦争前に工業学校を卒業し  
し、工作機械工場の職工となつたおかげ  
で微兵猶予となり、戦争中は、若くして  
戦艦の砲弾や飛行機のエンジン部品を造  
る工長として、学生勤務生や従用工の先  
頭に立つて、お国のために、お国のために  
だ、と尻を叩いてきた。それが、縁あつて同  
じ開拓団の男と再婚し、駐留軍向けの七

面鳥飼育や温室メロン栽培が大当たりし  
たら、今度は戦地からの引き揚げ社員  
が溢れ、そのあたりで伝次郎は東京本社  
の営業部に転勤となつた。

「俺が営業」。全国の納入先を回り、戦  
前の古い機械の代替えを獎め、ついでに  
新しい顧客も見つけてとい、という命令  
である。

人と話すのが得意じゃないから、機械  
をいじって、これをもう少し削ればま  
くいくんじゃないかな。画面はいままでの  
精度になつてので、もつと丁寧に仕上  
げたほうが長く使えるんじやないか。  
そういうお姉さんの顔を想像しながらモノづ  
くりをするのが好きなんだ。それが営業  
されるよりマシな時代だった。

「ねえ、襖と壁さ」と勝が聞こえようと  
隣のお家、今日から建て増しの工事が  
始まるから、帰りは氣を付けてね」

「さすが横浜銀行のエリートさん。まだ  
あの家だけ建ててから大して経つてな  
いじやん。金持ちなんだねえ」

「謙ひは今まで寝てるの、遅刻するよ  
うだ」と笑ひながら、こた渤海になつてし  
て、と母の決まり文句だが、今日はこ  
となく沈んでいることに勝は氣づいた。

「謙ひは機関士になるんじゃなかつた  
か」「トンネルで煙に巻かれて苦しいからや  
めた」

そう言ひて事にしていたのに。

しかし、伝次郎は気の迷ぬ仕事をも  
うしなければならないらしい。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「ほら時計見なさい。時間だよ」

急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「文句屋の伝ちゃん」と伝次郎は会社で  
呼ばれていた。戦争前に工業学校を卒業し  
し、工作機械工場の職工となつたおかげ  
で微兵猶予となり、戦争中は、若くして  
戦艦の砲弾や飛行機のエンジン部品を造  
る工長として、学生勤務生や従用工の先  
頭に立つて、お国のために、お国のために  
だ、と尻を叩いてきた。それが、縁あつて同  
じ開拓団の男と再婚し、駐留軍向けの七

面鳥飼育や温室メロン栽培が大当たりし  
たら、今度は戦地からの引き揚げ社員  
が溢れ、そのあたりで伝次郎は東京本社  
の営業部に転勤となつた。

「俺が営業」。全国の納入先を回り、戦  
前の古い機械の代替えを獎め、ついでに  
新しい顧客も見つけてとい、という命令  
である。

人と話すのが得意じゃないから、機械  
をいじって、これをもう少し削ればま  
くいくんじゃないかな。画面はいままでの  
精度になつてので、もつと丁寧に仕上  
げたほうが長く使えるんじやないか。  
そういうお姉さんの顔を想像しながらモノづ  
くりをするのが好きなんだ。それが営業  
されるよりマシな時代だった。

「ねえ、襖と壁さ」と勝が聞こえようと  
隣のお家、今日から建て増しの工事が  
始まるから、帰りは氣を付けてね」

「さすが横浜銀行のエリートさん。まだ  
あの家だけ建ててから大して経つてな  
いじやん。金持ちなんだねえ」

「謙ひは今まで寝てるの、遅刻するよ  
うだ」と笑ひながら、こた渤海になつてし  
て、と母の決まり文句だが、今日はこ  
となく沈んでいることに勝は氣づいた。

「謙ひは機関士になるんじゃなかつた  
か」「トンネルで煙に巻かれて苦しいからや  
めた」

そう言ひて事にしていたのに。

しかし、伝次郎は気の迷ぬ仕事をも  
うしなければならないらしい。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「ほら時計見なさい。時間だよ」

急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら  
「不器用だからね」と呟き、脱衣場の  
物置庫に向かった。

「文句屋の伝ちゃん」と伝次郎は会社で  
呼ばれていた。戦争前に工業学校を卒業し  
し、工作機械工場の職工となつたおかげ  
で微兵猶予となり、戦争中は、若くして  
戦艦の砲弾や飛行機のエンジン部品を造  
る工長として、学生勤務生や従用工の先  
頭に立つて、お国のために、お国のために  
だ、と尻を叩いてきた。それが、縁あつて同  
じ開拓団の男と再婚し、駐留軍向けの七

面鳥飼育や温室メロン栽培が大当たりし  
たら、今度は戦地からの引き揚げ社員  
が溢れ、そのあたりで伝次郎は東京本社  
の営業部に転勤となつた。

「俺が営業」。全国の納入先を回り、戦  
前の古い機械の代替えを獎め、ついでに  
新しい顧客も見つけてとい、という命令  
である。

人と話すのが得意じゃないから、機械  
をいじって、これをもう少し削ればま  
くいくんじゃないかな。画面はいままでの  
精度になつてので、もつと丁寧に仕上  
げたほうが長く使えるんじやないか。  
そういうお姉さんの顔を想像しながらモノづ  
くりをするのが好きなんだ。それが営業  
されるよりマシな時代だった。

「ねえ、襖と壁さ」と勝が聞こえようと  
隣のお家、今日から建て増しの工事が  
始まるから、帰りは気を付けてね」

「さすが横浜銀行のエリートさん。まだ  
あの家だけ建ててから大して経つてな  
いじやん。金持ちなんだねえ」

「謙ひは今まで寝てるの、遅刻するよ  
うだ」と笑ひながら、こた渤海になつてし  
て、と母の決まり文句だが、今日はこ  
となく沈んでいることに勝は氣づいた。

「謙ひは機関士になるんじゃなかつた  
か」「トンネルで煙に巻かれて苦しいからや  
めた」

そう言ひて事にしていたのに。

しかし、伝次郎は気の迷ぬ仕事をも  
うしなければならないらしい。

「幼稚園には何に行くんだ。子供は親  
からつながらないんですよ。お友達も幼稚園  
に行つてらっしゃい。今日も残業ですか。

「ほら時計見なさい。時間だよ」

急かされるまま一人の少年は朝飯をか  
き込み通学路に向かった。ホツと一息つ  
くと弘江は昨夜の光景を反芻しながら